

桜花の候 支部会員の皆様には愈々ご清福の段、大慶に存じます。

今年の開花は例年になく遅い様で、3月18日の高等工科学校60期生徒卒業式に武山の染井吉野は間に合わず、卒業生は山桜や河津桜に見送られた処です。

306名の若桜達は3年前のひ弱な少年から筋骨逞しく成長し、各々指定された陸曹教育隊へと進み、来年1月1日には陸上自衛隊最年少の3等陸曹に任官します。

卒業式では生徒や保護者のみならず、我々来賓も毎回貰い泣きをするのですが、毎年参加される小泉進二郎衆議院議員は「生徒諸君は何故ご来賓が涙を拭うのか判りますか？それはご臨席のご来賓の皆様は、生徒3年間でどんなに大変だったかよくご存じだからなのです」とスピーチされました。

横須賀が地元の小泉議員は祖父から数えると3代目で、卒業式や入校式そして開校祭と毎回出席して頂き、親父譲りの演説上手には本当に感心させられます。

前後しましたが同5日は32連隊会参加のため大宮駐屯地まで出向き、戦友達と互いの無事を確認しつつ旧交を温めてきた次第です。

同29日、衆議院第1議員会館で開催された「美しい日本の憲法をつくる国民の会 代表者会議・中央大会」に参加して、多くの著名人との交流がありました。

平沼赳夫、古屋圭司、下村博文、木原稔、中山恭子などの保守系国会議員約30名を始め、櫻井よし子、田久保忠衛、百道章各氏などの保守論客に、我々を加えた総勢200名を超える参加者のパワーで会場は熱気に包まれたところです。

そこで執行部から新年度6項目の国民運動方針案が提示され、その2項目は国会議員に対し憲法改正国会発議の優先課題として①緊急事態条項、②自衛隊の明記を要望すると言う、誠に心強いものでした。

いつまでという期限は切りませんでした、次回参議院選挙までの2年間で勝負と云う認識は、参加者共通の思いであったような気がしてなりません。

今月も小川先生のメルマガの中から、興味深い記事を見つけましたのでご紹介致しますが、小川先生は来月3日の憲法記念日に講師として来宮されますので、同封のチラシをご一読頂き、是非ご来場頂きますようご案内申し上げます。

## ・敵基地攻撃能力——議論の現状は

自民党内でも、敵基地攻撃能力の保有をめぐる議論が進んでいるようです。それはそれとして重要な歩みだと肯定的に評価したうえで、記事から読み取ることで

る議論の現状について、申し上げておかなければならないことがあります。

## 保有の検討進むも「配備まで5年」情報収集や米国の理解も課題

「北朝鮮による核・弾道ミサイルの脅威が高まっていることを受け、敵基地攻撃能力の保有を検討する動きが進んでいる。自民党は今春にも提言をまとめる方針で、安倍晋三首相も保有に含みを残している。だが、敵基地攻撃能力の導入が決まっても『どんなに早くても態勢構築に5年はかかる』(元航空自衛隊幹部)のが実情だ。攻撃目標に関する情報収集や米国の理解など課題も多く、一刻の猶予も許されない。

『国民の生命と財産を守るためには何をすべきか。さまざまな検討を行っていくべき』

安倍首相は2日の参院予算委員会で、敵基地攻撃能力についてこう述べた。浮かんでは消えてきた議論だが、戦略環境が厳しさを増す中で、停滞していた国内議論を後押ししつつある。自民党の安全保障調査会は次期中期防衛力整備計画に向けた提言を今国会中にまとめる方針で、攻撃能力保有も重要な柱として位置づけられる見通しだ。

政府・自民党内で想定されるのは、イージス艦から発射される巡航ミサイル『トマホーク』や、F35戦闘機などによる空対地攻撃だ。巡航ミサイルであれば戦闘機パイロットを危険にさらすことなく攻撃でき、戦闘機であれば誤情報に基づく攻撃をギリギリで回避する柔軟性が確保できる。(後略)」(3月3日付け産経新聞)

この記事で気になる点は2つあります。

第1は、「戦闘機であれば誤情報に基づく攻撃をギリギリで回避する柔軟性が確保できる」という個所です。「巡航ミサイルであれば戦闘機パイロットを危険に曝す事なく攻撃でき、」という点はその通りですが、戦闘機であれば誤情報に基づく攻撃をギリギリで回避する柔軟性が確保できる。」という部分は、首を傾げるを得ないのです。

これは、わずかな数の戦闘機に巡航ミサイルなどを搭載し、敵国の比較的近くの空域に待機させるというイメージではないかと思いますが、実際の航空攻撃をよく理解していない印象があるのです。航空機による敵基地攻撃能力については、米空軍のストライク・パッケージの考え方が参考になります。基本的に次のような編成です。

- 1) 空中警戒管制機(AWACSなど) 1~3機
- 2) 攻撃を担当する戦闘爆撃機など 数十機
- 3) 戦闘爆撃機部隊の護衛と戦闘空中哨戒を行う戦闘機 数機~数十機
- 4) 敵の防空網を制圧する部隊 数機~数十機
  - ・ワイルドウィーゼル(対レーダーミサイル搭載)

- ・チャフシッパ(チャフを散布)
  - ・電子戦機(電子妨害を担当)
- 5) 空中給油機 数機～10機
- 6) 偵察機(戦果の確認など) 数機

このストライク・パッケージを即応戦力として機能させるには、そして同時に数個のストライク・パッケージを投入できるためには、分母となる大規模な航空戦力が必要となります。

たとえばの話ですが、現在500機足らずの作戦用航空機しかない航空自衛隊を、2000機、3000機の規模に増強しなければならないような話なのです。

これは到底無理な話ですから、イージス艦だけでなく潜水艦にもトマホーク巡航ミサイルを搭載する考え方のほうが現実的だと思います。

第2は、一番最後に書かれている「米国内には、日本が戦略的に『自立』することに対する警戒も根強く、攻撃能力保有に至る過程ではトランプ米政権の理解も必要となる。」という箇所です。

日本が敵基地攻撃能力を備えるということは、日本に「戦争の引き金」を持たせるということでもあります。それをコントロールできなければ、米国は同盟国としての義務から望まない戦争に引き込まれるリスクを負うことになります。

だから、イージス艦や潜水艦にトマホーク巡航ミサイルを搭載する方向であろうとも、基本的には否定的なのです。

しかし、韓国が短距離弾道ミサイルと巡航ミサイルで構築している「キル・チェーン」に倣って、米軍の統制下で運用する方式を追求する道はあるのではないかと思います。その場合は、日本もトマホーク巡航ミサイルに加えて準中距離弾道ミサイルを保有するという選択が現実的なものになってくるでしょう。

産経新聞の記事は、以上のような点に触れていませんが、これは自民党の議論がまだまだ上っ面に終始している事を物語っており、敵基地攻撃能力を持つというのは10年早い、と先人達から叱られそうな感じがしてなりません。(小川和久)

皆様からのご質問やご意見をお待ち申し上げます。呉々もご自愛下さい。

平成29年4月1日

宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部長 小倉和彦